

ドイツ語の二重疑問詞疑問文に観察される優位現象とその消失

山本 将司

西日本国際学院非常勤講師

bpsf169@yahoo.co.jp

Key Words: 派生の経済性の原理、フェイズ理論、スクランブリング素性[u Σ]と EPP 特性、Wackernagel Movement、'(in)coherent'な非定形節

0. 初めに

本稿は優位現象を最短牽引の条件(Attract Closest, AC)や最小連結の条件(Minimal Link Condition, MLC)のような構造上の上下関係に言及する統語条件を仮定せずに説明することが可能であると主張する。そして、優位効果とされる多重疑問詞疑問文に於ける非文法性を説明することに加えて、AC や MLC による説明では予測しえなかった優位効果消失現象に対しても説明を与えることが可能であることを示す。

この目的に向けて、本稿はコストが科せられる統語操作である移動(Move)よりも無コストで実行される併合(Merge)を文法は可能な限り選択する、また移動を選択するしかない場合では移動の適用回数が極力少なくなる派生を選択するという Chomsky (1995, 2001)、Collins (1997)、Toyoshima (2005)等の「派生に関する経済性の原理」を採用し、それに加えて Chomsky (2001, 2005)で提唱された「フェイズ(Phase)の理論」を認める。フェイズ理論に従うと、あるフェイズに生じた要素がそのフェイズの境界を越えて外部へ移動する場合、各フェイズ端を経由した循環的移動を介することが求められる。最小主義的統語論の中では、このような循環的な移動を駆動する動機も解釈不可能素性の照合、削除とされる。

ここで AC や MLC を認めないという立場に立てば、i) 下位フェイズに由来する下位疑問詞を上位フェイズへ上昇させる動機となる素性が存在する、ii) 上位フェイズ内で派生間の競合に優劣が存在しない、という二つの条件を満たす多重疑問詞疑問文の派生が可能であれば優位現象は消失すると予測される。また条件 i) に相応しい素性として、本稿は Müller (2004)がドイツ語に於いてスクランブリングを駆動する要因となる素性として仮定した解釈不可能素性[u Σ]を採用する。

本稿は以下のような構成からなる。第一節では素性'[u Σ]'が優位効果消失現象に果たす統語論的役割を概観する。第二節ではドイツ語の優位現象とその消失に関する資料を提示し、第三節に於いて優位現象とスクランブリング現象との間の共通性を指摘する。第四節ではこの共通性を説明する為に必要な仮定を行い、第五節でドイツ語に於ける'incoherent'な不定形節に隔てられた二重疑問詞疑問文、第六節で Wackernagel Movement が生じた二重疑問詞疑問文という二つの統語環境に於ける優位現象とその消失について議論する。

1. フェイズと優位効果

「フェイズ理論」に於いて、移動を駆動する要因となる解釈不可能素性 Probe と移動の候補となる素性 Goal は同一のフェイズ内に共起していなければならないということが「フェイズ不可侵の条件 (Phase Impenetrability Condition, PIC)」より帰結される。

(1) Phase Impenetrability Condition:

The domain of H is not accessible to operations at ZP; only H and its *edge* are accessible to such operations.

Chomsky (2001: 13 (11))

PIC より表面上フェイズを越えるように見える移動は移動の起点と最終的な着地点との間の全てのフェイズを循環的に経由した移動であることも帰結される。よって、英語に於いてフェイズとされる小動辞 vP 内から CP-指定部へ目的語が wh-移動する場合、目的語疑問詞は小動辞 v が抱えた何らかの解釈不可能素性を削除するために一度 vP 指定部へ移動し、更にその位置から CP-指定部へと循環的に移動する¹。フェイズ理論を以上のように踏まえた上で、以下では優位現象の典型とされる主語疑問詞と目的語疑問詞との間の優位効果を説明する。

(2) a. Who bought what?

b. *What did who buy?

(3) a. 疑問詞疑問節の補文標識は解釈不可能素性'[u-wh]'を必ず持つ。また、素性'[wh]'を持つ疑問詞はこの素性を照合可能である。

b. 小動辞 v は解釈不可能素性'[u-wh]'を選択的に持つ。

¹ Chomsky(1995, 2001)では wh-移動の要因となる素性を主要部 C、及び主要部 v が持つ解釈不可能素性'[(u)Q]'としている。

- (4) a. [_{VP} who[wh] v[~~u-wh~~] [_{VP} buy what[wh]]]
 b. [_{CP} who[wh]_i C[~~u-wh~~] [_{TP} t_i'... [_{VP} t_i v[~~u-wh~~] [_{VP} buy what[wh]]]]]]

文(2a)は以下の派生を経て生成される。まず、最初のフェイズとして vP(4a)が生成される。vP(4a)内部にはその主要部である小動辞 v が抱える解釈不可能素性'[u-wh]'を照合可能な素性'[wh]'を含む構成素として主語疑問詞'who[wh]'と目的語疑問詞'what[wh]'の二つが存在している。この時、解釈不可能素性'[u-wh]'は vP 指定部に基底生成された主語疑問詞'who[wh]'によって削除可能なので、「派生の経済性の原理」より vP(4a)の内部で素性'[u-wh]'を削除する為に移動が選択されることはない。その後、(4b)に示すように派生は CP フェイズまで進む。CP 主要部である補文標識 C が持つ解釈不可能素性'[u-wh]'は移動による削除が必要であるが、PIC に従うと補文標識 C が探索可能な領域は時制辞句 TP から動詞句 VP を除いた領域に限定される。そして、この領域内に存在する移動の対象は主語疑問詞'who[wh]'のみなので、補文標識 C が持つ解釈不可能素性'[u-wh]'は主語疑問詞'who[wh]'が CP 指定部に移動することで削除され、文(2a)として全体の派生が収束する。

これに対して(2b)を派生するには目的語疑問詞'what'を CP 指定部まで wh-移動する必要がある。このような目的語疑問詞'what'の移動は中間フェイズである vP(4a)の指定部へ'what'が移動することが求められる。だが、上述したように目的語疑問詞'what'の vP 指定部への移動は余剰的であり、このような移動は「派生の経済性の原理」により排除される。よって、(2b)を vP(4a)より派生することは不可能となり、(2b)は非文法的である。

一方、仮定(3)に従うと小動辞 v が素性'[u-wh]'を持つのは選択的であり、小動辞が素性'[u-wh]'を持たない場合の派生も論理的選択肢として考えられる。

- (5) a. [_{VP} who[wh] v[] [_{VP} buy what[wh]]]
 b. [_{CP} who[wh]_i C[~~u-wh~~] [_{TP} t_i'... [_{VP} t_i v[] [_{VP} buy what[wh]]]]]]

この場合、vP(5a)の内部で素性削除や移動は生じない。そして、派生が CP(5b)へ進むと、主語'who'により補文標識 C が持つ解釈不可能素性'[u-wh]'が削除される。よって、この場合も文(2a)のみを派生し、(4b)と同様の結果となる。

以上の議論が正しければ、二重疑問詞疑問文(2)と異なり二つの疑問詞が両者とも動詞句 VP 内に生じた場合、(2a)と(2b)に対比されるような優位性は観察されないと予測される。この予測は(6)のように目的語と副詞が疑問表現である二重疑問詞疑問文や(7)のように与格名詞句と対格目的語が疑問表現である二

重疑問詞疑問文に優位性が観察されないことから正しいと思われる。

- (6) a. Where did John put what?
b. What did John put where?
(7) a. What did John give to whom?
b. To whom did John give what? ²

本稿の仮定に従えば、(6)や(7)に優位性が観察されない理由は両者の派生に要するコストに差が存在しないからと答えられる。それを(6a,b)、及び(7a,b)の派生を概観しながら示す。

先ず、(6a)と(6b)の派生に共通する小動辞句 vP の構造として(8)を与える。

- (8) [_{VP} John v[u-wh] [_{VP} [_{VP} buy what[wh]] where[wh]]]

この構造に於いて小動辞 v が持つ素性'[u-wh]'を削除する為に駆動される移動の対象となる疑問詞'what'と'where'は両者とも VP 内に基底生成される。この構造から'what'が vP 指定部へ移動することにより(9a)が、'where'を移動することにより(9b)が生成される。

- (9) a. [_{VP} what[wh]_i [John v[~~u-wh~~] [_{VP} [_{VP} buy t_i] where[wh]]]]
b. [_{VP} where[wh]_j [John v[~~u-wh~~] [_{VP} [_{VP} buy what[wh]] t_j]]

この時、いずれの構造も一回の移動によって派生されている。よって、コスト上両者に差は存在せず互いが互いを排除することはない。

² 前置詞与格疑問詞句を前置詞が残留した形で移動した場合、ここで問題となっている優位効果とは異なった非文法性を生じる。

i) Who(^m) did who give what to?

この場合、前置詞与格'whom'を前置詞残留して文頭に移動すると著しく容認性が悪化するが、前置詞与格'who'だとそのような容認性悪化は見られない。これと類似の文法性判断は Stroik (1996)にも示されている。

ii) a. To whom did Lou give what?
a'. *Whom did Lou give what to?
b. For whom did Lou do what?
b'. *Whom did Lou do what for?

Stroik (1996:102 (64))

このような前置詞残留した疑問詞移動に纏わる容認性の違いは優位性に関する問題ではなく、前置詞とその補部である名詞句(疑問詞句)との間に生じた格表示の仕組みに関する問題だと思われる。

また、Larson (1988)に従い前置詞与格構文(7)に含まれる小動辞句に対して対格目的語が前置詞与格よりも上位に位置する構造(10)を与える。

(10) [_{VP} John v[u-wh] [_{VP} [_{VP} give [what[wh] [_{PP} to whom[wh]]]]]]

(11) a. [_{VP} what[wh] [_{VP} John v[~~u-wh~~] [_{VP} [_{VP} give [t_i [_{PP} to whom[wh]]]]]]]]

b. [_{VP} [_{PP} to whom[wh]]]_j [_{VP} John v[~~u-wh~~] [_{VP} [_{VP} give [what[wh] t_j]]]]]

この構造でも移動の対象となるのは対格目的語疑問詞'what[wh]'と与格疑問詞'who[wh]'であり、いずれが移動しても派生に要するコストは一回の移動のみで両者とも等しい。よって、互いが互いを排除する事はなく両者とも文法的である。

以上、フェイズ理論と派生の経済性の原理を仮定することで主語疑問詞-非主語疑問詞間に見られる優位性(2)に加えて、目的語-副詞間に於ける優位効果消失(6)、並びに与格構文に於ける対格目的語-前置詞与格間の優位効果消失(7)に対して説明を与えた。だが、この説明は主語-非主語間の優位性、並びに二つの非主語疑問詞間の非優位性(二つの疑問詞間の等価性)は説明できても、主語-非主語間の優位性が消失する場合があるとは予測できない。何故なら、(4)に於いて論じたようにVP内に基底生成された疑問詞を節頭へwh-移動するにはPIC違反を避けるために疑問詞を予め基底位置からvP指定部へ移動することが要求されるが、VP内疑問詞に加えて主語も疑問詞であるならばVP内疑問詞の移動は「経済性の原理」より許されないからである。よって、英語に限らず主語-非主語である二重疑問詞の間で優位性が見られない疑問文の派生では、解釈不可能素性[u-wh]'以外の何らかの解釈不可能素性[uF]'が要因となったvP指定部への移動が生じていると考えられる。

(12) [_{VP} who[wh] what[wh, F]_j [v[uF] [_{VP} buy t_j]]]

本稿では、非主語疑問詞が主語疑問詞を越える優位性に反した移動を引き起こす要因となる素性[uF]'を Müller (2004)に従い解釈不可能素性[uΣ]'と仮定する。この素性[uΣ]'は言語普遍的に小動辞vが持つ解釈不可能素性でありVP内の文要素を動詞句外部へ転移させる解釈不可能素性である。次節以降、この素性[uΣ]'は Fanselow (2004)、Grohmann (1997)、Kuno (2001)、Müller (2004)、Wiltschko (1997)等と言及されているドイツ語に於ける優位効果とその消失を説明する上でも有意義であるということを議論する。

2. ドイツ語の優位効果

Fanselow (2004)、Grohmann (1997)、Kuno (2001)、Müller (2004)、Wiltschko (1997)等の多くの先行研究によってドイツ語、スウェーデン語、アイスランド語、スペイン語、ポーランド語等の多くの言語で二重疑問詞疑問文に於ける優位効果(短距離優位効果³)が消失する事が指摘されている。

- (13) a. Vad koepte vem? (Swedish)
what bought who
b. hvað keypti hver? (Icelandic)
what bought who
c. qué dijo quién? (Spanish)
what said who
d. co kto robił? (Polish)
what who did
e. was hat wer gelesen (German)
what has who read

Fanselow (2004: 93 (35))

本節ではこれらの言語の中でも特にドイツ語に於ける優位効果消失現象に注目する。それにより、主語-非主語間の優位効果が消失した二重疑問詞疑問文を派生する為に必須であると考えられる非主語疑問詞の vP 指定部への移動を駆動する要因となる素性が如何なるものであるかを考察する。

ドイツ語の優位効果消失現象はこの問いに対する答えを求める上で以下のような興味深い統語的性質を示す。Fanselow (2004)、Müller (2004)によれば、(13e)のように単一節内に存在する二重疑問詞間の優位性は消失するとされるドイツ語に於いても、二重疑問詞の間に定形節が介在する場合に限り優位効果が観察される(長距離優位効果⁴)。

³ 本稿では単一節内に現れた二重疑問詞に認められる優位効果を「短距離優位効果」と呼び、節境界に隔てられた二重疑問詞に認められる優位効果を「長距離優位効果」と呼んで区別する。「短距離優位現象」、「長距離優位現象」も同様。

⁴ Müller (2004)も補文標識'daß'によって標識された定形節を超える wh-移動には長距離優位効果が観察されるとしている。また、Fanselow (2004)によれば'daß'定形節を隔てた二重疑問詞でも優位効果が消失する方言が存在すると報告されている。

(i) Nonstandard German: Subordinate clause wh-elements crossing matrix wh-phrases

a. ^(?) wer hat gehofft, dass Irina wen einladt
who_{NOM} has hoped that Irina who_{ACC} invites

- (14) a. *Wen hat wer gehofft, [CP daß Irina einlädt]
 who_{ACC} has who_{NOM} hoped that Irina invites
 'Who has hoped that Irina will invite who?'
 b. Wer hat gehofft, [CP daß Irina wen einlädt]
 who_{NOM} has hoped that Irina who_{ACC} invites
 Fanselow (2004: 77 (10))
- (15) a. Wer₁ hat t₁ geglaubt [CP daß der Fritz wen mag]?
 Who_{NOM} has believed that the Fritz whom_{ACC} likes
 'Who believed that Fritz likes whom?'
 b. *Wen₂ hat wer₁ geglaubt [CP daß der Fritz t₂ mag]?
 whom_{ACC} has who_{NOM} believed that the Fritz likes
 Müller (2004 (24))

これに対して、二重疑問詞を隔てる節が非定形である場合、優位効果は再び消失する。

- (16) a. Wen hast du überredet [CP was dir zu verkaufen]?
 Who have you persuaded what to-you sell
 'Who did you persuade to sell what to you?'
 b. Was_i hast du wen überredet [CP t_i dir zu verkaufen]?
 What have you who persuade to-you sell
 Lit. 'What did you persuade who to sell to you?'
 Kuno (2001: 50 (29))
- (17) a. (Ich weiss nicht) wen₁ er t₁ überzeugt hat [CP was₂ zu kaufen]?
 I know not whom_{ACC} he convince has what_{ACC} to buy
 'I don't know what he convinced to buy what?'
 b. (Ich weiss nicht) was₂ er wen überzeugt hat [CP t₂ zu kaufen]?
 I know not what_{ACC} he whom_{ACC} convince has to buy
 Müller (2004-(25))

(18) 定形節を隔てた二重疑問詞には優位効果が観察される。

-
- b. wen hat wer gehofft, dass Irina einladt
 who_{ACC} has who_{NOM} hoped that Irina invites
 c. was hat wer gehofft, wen Irina einladt
 what_{ACC} has who_{NOM} hoped who_{ACC} Irina invites

よって、ドイツ語に於ける長距離優位効果とその消失は上記(18)のように二重疑問詞の間に介在する節の定性によって条件付けられる。この一般化を踏まえた上で、次節では如何にしてこの一般化が導かれるかを論じたい。

3. ドイツ語に於けるスクランブリングと優位効果

前節ではドイツ語の二重疑問詞の間に定形節が介在する場合に限り優位性が現れるという事実に対して一般化(18)を提示した。

(19) [WH₂ ... WH₁ ... [CP definite C [... t_{WH2} ...]]]
 *▲—————|

即ち、定形節によって隔てられた上位疑問詞を越えて下位疑問詞が移動することは不可能である。

移動(19)を禁止する要因を考える時、ドイツ語に於いて節の定性に制約される別の移動現象を考察することは有意義である。そのような現象の一つとして本節ではドイツ語に於ける長距離スクランブリング現象を挙げる。ドイツ語では(20)、(21)、(22)に示すように非定形節を越える長距離スクランブリングは可能だが、(23)のような定形節を越えた長距離スクランブリングは許されない。

- (20) a. ... daß ich_i dem Kunden [PRO_i [den Kühlschrank] zu reparieren]
 that I the client_{DAT} the refrigerator_{ACC} to repair
 versprochen habe
 promised have
 'that I have promised the client to repair the refrigerator'
- b. ... daß ich_i [den Kühlschrank]_j dem Kunden [PRO_i t_j zu reparieren]
 versprochen habe
- c. ... daß [den Kühlschrank]_j ich_i dem Kunden [PRO_i t_j zu reparieren]
 versprochen habe
- (21) a. ...daß der Detektiv_i dem klienten [PRO_i [den Verdächtigen]
 that the detective_{NOM} the client_{DAT} the suspect_{ACC}
 [des Verbrechens] zu überführen] versprochen hat
 the crime_{GEN} to indict promised has
 'that the detective has promised the client to indict the suspect of the crime'
- b. ...daß [des Verbrechens]_k der Detektiv_i [den Verdächtigen]_j dem klienten [PRO_i
 t_j t_k zu überführen] versprochen hat

- (22) a. ... daß der Rat [dem Pfarrer][[die Witwen]_i
 that the council_{NOM} the priest_{DAT} the widow_{ACC}
 [PRO_i [der Opfer] gedenken] zu lassen] versprochen hat
 the victims_{GEN} commemorate to let promised have
 'that the council has promised the priest to let the widows commemorate the victims'
- b. ...daß [die Witwen]_i [der Opfer]_k [dem Pfarrer]_j der Rat _{t_j t_i} [PRO_i t_k gedenken zu lassen] versprochen hat
- (23) a. Gestern hat [IP der Lehrer [VP den Schüler darauf hingewiesen
 yesterday has the teacher_{NOM} the pupil_{ACC} on-it referred
 [C' daß [IP Berber eine schwere Sprache ist]]]]
 that Berber_{NOM} a difficult language_{NOM} is
 'Yesterday the teacher pointed out to the pupil that Berber is a difficult language.'
- b. *Gestern hat [IP der Lehrer [VP [NP eine schwere Sprache]_i [VP den Schüler darauf hingewiesen [C' daß [IP Berber t_i ist]]]]
 c. *Gestern hat [IP [NP eine schwere Sprache]_i [IP der Lehrer [VP den Schüler daraufhingewiesen [C' daß [IP Berber t_i ist]]]]

Grewendorf & Sabel (1994: 264 (1))

- (24) ドイツ語では定形節を跨いだ長距離スクランブリングが許されない。

このようにドイツ語に於いて優位効果が維持される統語環境と長距離スクランブリングが不可能となる統語環境は類似しており、両者は介在節の定形性に制約される。

この制約は優位性に反する移動とスクランブリング移動に共通して削除される素性が存在し、この素性を削除可能な移動対象は一度定形節を越えてしまうと素性を削除する能力を失ってしまうことを示唆している。本稿ではこのような素性として Müller (2004) が仮定した解釈不可能素性'[uΣ]'を採用する。

- (25) スクランブリングは小動辞 v が持つ解釈不可能素性'[uΣ]' (Müller (2004)) を削除するために駆動される移動である⁵。

⁵ Müller (2004) はフェイズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition, PIC) をフェイズではなく句を単位とした条件 (Phrase Impenetrability Condition) に置き換えることによって弱代名詞の出現位置と優位効果消失現象に対して説明を行っている。

i) Müller (2004) の Phrase Impenetrability Condition (句不可侵条件) :

ドイツ語の二重疑問詞疑問文に現れる下位疑問詞は *vP*-指定部へスクランプリングすることで補文標識 *C* が参照可能な領域にまで引き上げられる。すると、下位疑問詞と元々 *VP* 外部に基底生成した上位疑問詞が同一フェイズ内に出現することになる為、いずれの疑問詞もフェイズ不可侵条件(*PIC*)に違反することなく *CP* 指定部へ *wh*-移動することが可能となる。その上で最短牽引の条件(*AC*)を仮定しないのであれば、それぞれの移動を含む二つの派生の間にはコスト差が生じない限り、どちらの派生も文法上適格となる。即ち、優位性が消失する。

Wiltschko (1997)、Fanselow (2004)等は、優位現象は最短牽引の条件に支配されるという立場を維持しながら、ドイツ語に於ける優位効果消失現象をスクランプリング移動と結び付けて説明している。それらの先行研究によると、構造的に下位に位置する疑問詞をスクランプリングによって上位疑問詞よりも高い位置へ移動可能であれば、上位疑問詞と下位疑問詞との間の構造的上下関係が逆転するので最短牽引の条件に従いつつ下位疑問詞に *wh*-移動を適用する事が可能になる。その結果、見た目上優位性に反する移動がドイツ語では許されることになる⁶。本稿は最短牽引の条件を認めない点では彼らの立場と反するが、優位効果が消失する条件を満たす上で下位疑問詞に対するスクランプリング移動の適用が重要な役割を果たすという点は共通している。このような立場に立つと、スクランプリング移動が不可能な統語環境では優位性に反する移動を行うことはできず優位効果も維持されると予測される。

本節ではスクランプリングが不可能な統語環境としてスクランプリングの着点と起点に定形節が介在する文構造を挙げた。次節では、このような環境に於ける優位効果消失とスクランプリング移動の間の類似性を *PIC* と「派生の経済

The domain of a head *X* of a phrase *XP* is not accessible to operations outside *XP*; only *X* and its edge are accessible to such operations.

句不可侵の条件に基づく限り疑問詞を *CP* 指定部へ *wh*-移動する為には動詞句、小動詞句といった *CP* の途中に介在する全ての句の指定部へ循環的に移動し *CP* 主要部から参照可能な領域（時制辞句 *TP* の指定部）まで移動することが要求される。

この条件を仮定した場合、優位効果は下位に位置する疑問詞を循環的に *CP* 指定部まで移動しなければならないのだが、この際に移動が経由する全ての句の主要部は移動を駆動する要因となる素性を持つ。Müller (2004)によれば、下位の疑問詞を補文標識 *C* が参照可能な領域まで引き上げることが可能な時に優位効果が消失する。

⁶ Wiltschko (1997)、Kuno (2001)のように、ドイツ語に於ける優位効果消失の要因をスクランプリングの結果として生じた優位関係の変化によって説明する議論は多い。しかしながら、このような説明を英語、スペイン語、スウェーデン語、アイスランド語等のスクランプリングを許さない言語に観察される優位効果消失現象に直接適用することはできない。

性の原理」を中心にして議論する。

4. 節の定形性と優位効果

スクランブリングを Müller (2004) に従い小動辞 v が持つ素性 $[u\Sigma]$ を削除する移動であると仮定することにより小動辞句 vP 内の非主語疑問詞を vP フェイズの端に移動することが可能になる。即ち、この素性は一般に主語疑問詞より下位とされる疑問詞を vP 端へ移動する要因となる素性である。ここで優位効果消失とスクランブリングとの相関を述べる上で必要となる仮定を行う。

(26) a. 小動辞 v と補文標識 C はフェイズ主要部である。

b. $v[(u-wh)_{+EPP}, (u\Sigma)_{+EPP}]$

c. $C[(u-wh)_{+EPP}, uT_{+EPP}]$

(27) a. ドイツ語の vP 構造

$[_{vP} \text{ subject } v[(u-wh)_{+EPP}, (u\Sigma)_{+EPP}] [_{vP} \text{ object } V]]$

b. ドイツ語の CP 構造

$[_{CP} C[(u-wh)_{+EPP}, uT_{+EPP}]] [_{TP} \dots [_{vP} \dots]]]$

(28) a. $+EPP$ は移動を強制する。

b. $-EPP$ は移動を強制しない (削除は移動を介さずとも行われる)⁷。

(29) ドイツ語の時制素性 $[uT]$ と主格素性 $[Nom]$ は異なる。

先ず、(26a)のように英語と同様にドイツ語でも小動辞 v と補文標識 C がフェイズ主要部であると仮定する。また、ドイツ語の他動詞主語が基底生成される構造上の位置は(27a)のように vP 指定部であることも英語と同様であると考えられる。さらに、素性 $[u\Sigma]$ の照合、削除に伴う移動の対象は主語以外の文構成素であり、 EPP 特性が $+$ である素性 $[u\Sigma]$ は(28a)に従い非主語が VP 内部から vP 指定部へ顕在的に移動することにより削除される。最後に(29)として、Pesetsky & Torrego (2001)で提案された $uT=Nom$ (時制素性と主格素性の等価性) 仮説はドイツ語に於いては成り立たないと仮定する。

Pesetsky & Torrego (2001)は英語では $uT=Nom$ であると主張する証拠として、i)英語の疑問詞疑問文に於いて主語疑問詞が文頭へ wh -移動した場合、 do -挿入 (do -insertion)が起こらない、ii)主語節が示す義務的な補文標識 $that$ の表示、iii) $that$ -

⁷ 本稿の EPP 素性に対して行った仮定(28)は Pesetsky & Torrego (2001)に倣っている。これは Chomsky (1995)が派生のどの段階で解釈不可能素性の照合、及び削除が行われるかを規定する為に導入した素性の強弱 (Strong/Weak Feature) という特性と同様の機能を果たす。

痕跡効果、等の現象を挙げている。さらに山本 (2010)は Pesetsky & Torrego (2001)の'uT=Nom'仮説を受け入れた上で PIC、及び「派生の経済性の原理」との相互作用より英語に於ける優位効果現象を説明することができると主張した。だが、本稿はドイツ語に於ける時制素性[uT]と主格素性[Nom]'は等質なものではないと仮定する。その理由として上述した Pesetsky & Torrego (2001)が挙げた英語の統語的性質について、i)ドイツ語には疑問文に於ける主語-助動詞の倒置は認められても do-挿入のような現象は存在しない、ii)英語の補文標識'that'の省略が許されるのは主語が CP-指定部へ移動する事により補文標識 C が持つ解釈不可能な時制素性[uT]が削除される場合に限られるという Pesetsky & Torrego (2001)の説明を踏まえた上で、ドイツ語の主格名詞句には時制素性[uT]'を削除する能力は持たない、iii)ドイツ語には that-痕跡効果が観察されない(Roussou (1993))、という三つの特性の存在が挙げられる。特に第二点について、Koopman (1984)、Haider (1985)、Haider, Olsen & Vikner (1995)によるとドイツ語に於いて補文標識'daß'が省略された補文節では主文と同様に動詞第二位(Verb Second)が強制され、ドイツ語の補文標識'daß'が省略可能なのは本来'daß'によって削除されるべき時制素性が CP 主要部へ移動した時制辞によって削除される。これに加えて、'daß'を欠いた補文節に於ける動詞第二位は主語が節頭に現れたとしても強制される。以上の二点より、ドイツ語の主格素性[Nom]'には解釈不可能な時制素性[uT]'を削除する力を持たず、両者が等価であるとは考え難い。

しかしながら、'uT=/ \neq Nom'は言語間差異をもたらす重要なパラメータである。ドイツ語は英語と対称的に'uT \neq Nom'と設定されており、このパラメトリックな違いが英語とドイツ語との間に優位効果とその消失現象の違いとして反映される。そこで、ドイツ語に観察される主文二重疑問詞疑問文に於ける主語-非主語間の優位効果消失現象を考察する。

- (30) a. Wer hat was gelesen?
 who_{NOM} has what_{ACC} read
 'Who has read what?'
 b. Was hat wer gelesen?
 what_{ACC} has who_{NOM} read

主文多重疑問詞疑問文(30)が派生される過程を vP フェイズ、CP フェイズの順に与えていく。先ず、仮定(27a)に従い問題の vP 構造を(31)のように与える。

- (31) [_{VP} wer v[u-wh_{+EPP}, u Σ _{+EPP}] [_{VP} was gelesen]]

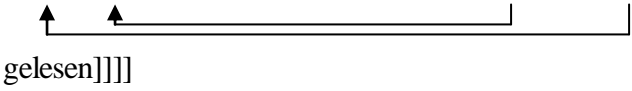
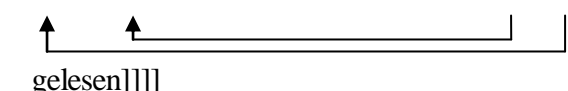
vP 主要部が解釈不可能素性'[uΣ]'を持つ時、基底生成された'wer'と素性'[uΣ]'を削除する為に移動した'was'とが多重指定部構造を成す vP が生成される。

(32) [_{VP} was_i wer v[u-wh_{+EPP}, uΣ_{+EPP}] [_{VP} t_i gelesen]]

続いて、上記のように生成された vP(32)を内包した CP が派生される。

(33) [_{CP} C[u-wh_{+EPP}, uT_{+EPP}][_{TP}...hat[T][_{VP} was_i wer v[u-wh_{+EPP}, uΣ_{+EPP}][_{VP} t_i gelesen]]]]

CP 構造(33)に於いて補部標識 C は二つの削除すべき素性'[u-wh_{+EPP}]'と'[uT_{+EPP}]'を持つ。素性'[uT_{+EPP}]'は仮定(29)より TP 主要部'hat[T]'の主要部移動によってのみ削除される。また、素性'[u-wh_{+EPP}]'は疑問詞'wer'、もしくは'was'を CP 指定部へ移動することによって削除される。すると、構造(33)より派生する収束した構造として(34a)、(34b)が生成される。

(34) a. [_{CP} wer_j hat[T]_k-C[u-wh_{+EPP}, uT_{+EPP}][_{TP}...t_k [_{VP} was_i t_j v[u-wh_{+EPP}, uΣ_{+EPP}] [_{VP} t_i gelesen]]]]

 b. [_{CP} was_i hat[T]_k-C[u-wh_{+EPP}, uT_{+EPP}][_{TP}...t_k [_{VP} t_i' wer v[u-wh_{+EPP}, uΣ_{+EPP}] [_{VP} t_i gelesen]]]]


即ち、構造(34a,b)は共に収束し、かつ派生に要するコストも等しい。よって、(34a,b)は互いに排除する関係ではなく、それぞれに対応した文(30a,b)も文法的になる。

このように、ドイツ語の主文二重疑問詞疑問文に於ける優位効果消失現象は最短牽引のような条件に依拠することなく派生の経済性に補助的な仮定を加えることで説明することが可能である⁸。この説明の中で優位効果について英語と

⁸ この主張に対して匿名査読者より以下の問題が指摘された。

- i) 英語に於いて、疑問詞句'which-NP'や'whose NP'が主語として現れた二重疑問詞疑問文では優位効果が消失する。
 - a. Which book did which person buy?
 - b. What did whose mother promise to read to you?
- ii) 英語では疑問詞'why'と'how'が現れた二重疑問詞疑問文は許されないが、ドイツ語では'why'に相当する'warum'が二重疑問詞疑問文に出現し、加えて主語疑問詞との

ドイツ語との間に観察される対照性を導き出す要因となったのは時制素性と主格素性の同一性に関する仮定(29)、及びドイツ語に観察されるスクランブリング移動を駆動する素性[uΣ]'の二つである。この素性[uΣ]'は単一節内のスクランブリングだけではなく二つ以上の節を越えた長距離スクランブリングをも駆動する。そして、この素性はドイツ語に於ける節を介在した二つの疑問詞の間に観察される優位現象とその消失を説明する上でも重要な役割を果たす。以下では、優位性と長距離スクランブリングとの間に共通する統語的性質が素性[uΣ]'を仮定することによって予測可能であることを示す。

(18) 定形節を隔てた二重疑問詞には優位効果が観察される。

(24) ドイツ語では定形節を跨いだ長距離スクランブリングが許されない。

3節で述べたように、長距離スクランブリングと長距離優位効果の成否は介在する節の定形性に支配される。ドイツ語のスクランブリング現象の詳細は本稿の範囲を越えるので立ち入らないが、本節で設けた一般化(18)、並びに(24)は以下の仮定を設けることによって統一的に説明可能である。

間に優位性を示さない。

c.*Whar did Mary do why/how?

d.*Why/How did Mary what?

e. Wer ist warum weggegangen?
who is why gone out

f. Warum ist wer weggegangen?
why is who gone out

Lit. *Who went out why?

問題 i)に対して山本 (2010)は移動に科せられるコストとは異なるコストを仮定することにより説明することを示唆している。概略を述べると、素性照合を行う探針(Probe)が無コストで参照可能なのはXP-主要部が持つ素性に限られ、XPの指定部や補部に埋め込まれた素性を参照するにはコストを要する。すると、'which'や'whose'のようなDP-指定部を占める疑問詞が持つ素性[wh]を参照するにはコストを要し、このコストがT-to-C移動に要したコストとの差を埋めることで主語疑問詞の優位性を打ち消すと考えられる。

問題 ii)について Stroik (1996)は指示的(referential)、非指示的という区別を疑問詞に与えることで説明している。しかしながら、このような説明はなぜ指示性に於いて英語の'why'と並行的であるドイツ語の疑問副詞'warum'が二重疑問詞疑問文に現れ得るのかを説明できない。さらに、wh-in-situ 言語である日本語でも'why'相当の「なぜ」と他の疑問詞の間に語順に応じた容認性の対照が見られる。

g. ?なぜ誰がここに来たの?

h. 誰が何故ここに来たの?

従って、この問題を解決するには統語論に加えて疑問文に関する意味論的考察も不可欠であり、これは将来の課題である。

(35) 素性'[u Σ]'は定形である CP を越えると非活性化する.

スクランブリングを解釈不可能素性'[u Σ]'を削除する移動と仮定した場合、節を越えた長距離スクランブリングはフェイズ端を循環的に経由し最終的な着地点に到達する移動である. 長距離スクランブリングでは移動の経路に介在するフェイズとして少なくとも vP、CP、そして CP に埋め込まれた vP の三つが存在する. この時、それぞれのフェイズ主要部は素性'[u Σ]'を持ち、スクランブリングの対象となる XP もそれを削除可能な素性'[u Σ]'を持つ. 即ち、基底的な構造(36a)から構造(36b)へ統語派生が進む.

- (36) a. [TP... [vP1 v1[u Σ +EPP] [vP1 ... [CP C[u Σ +EPP] [TP...[vP2 v2[u Σ +EPP] [vP2 XP[u Σ] V2]]]] V1]]]
 b. [TP ... [vP1 XP[u Σ] v1[u Σ +EPP] [vP2 ... [CP t'' C[u Σ +EPP] [TP ... [vP2 t' v2[u Σ +EPP] [vP2 t V2]]]]]] V1]]]

しかしながら埋め込まれた CP が定形節である場合、仮定(35)より構造(36)に於ける XP が持つ素性'[u Σ]'は CP 指定部へ移動した時点で非活性化するので、XP を vP1 指定部へ移動したとしても v1 が持つ解釈不可能素性'[u Σ]'を削除することはできない. 例を挙げると、(23b,c)のように定形節を跨いだ長距離スクランブリングによって名詞句'eine scwere Sprache'を定形節の外部へ移動したとしても、主文小動辞が持つ素性'[u Σ +EPP]'を削除することはできず派生は収束しない. 即ち、(23b,c)は非文法的である.

- (23) a. Gestern hat [IP der Lehrer [VP den Schüler darauf hingewiesen
 yesterday has the teacher_{NOM} the pupil_{ACC} on-it referred
 [C' daß [IP Berber eine scwere Sprache ist]]]]
 that Berber_{NOM} a difficult language_{NOM} is
 'Yesterday the teacher pointed out to the pupil that Berber is a difficult language.'
 b. *Gestern hat [IP der Lehrer [VP [NP eine scwere Sprache]_i [VP den Schüler darauf
 hingewiesen [C' daß [IP Berber t_i ist]]]]
 c. *Gestern hat [IP [NP eine scwere Sprache]_i [IP der Lehrer [VP den Schüler darauf
 hingewiesen [C' daß [IP Berber t_i ist]]]]

一方、CP が非定形である場合は、問題となる素性[u Σ]'の非活性化は生じず、(36a)から(36b)への派生に問題は生じない。即ち、(20b,c)のような非定形節を跨いだ長距離スクランブリングが可能である。

- (20) a. ... daß ich_i dem Kunden [PRO_i [den Kühlschrank]] zu reparieren]
 that I the client_{DAT} the refrigerator_{ACC} to repair
 versprochen habe
 promised have
 'that I have promised the client to repair the refrigerator'
- b. ...daß ich_i [den Kühlschrank]_j dem Kunden [PRO_i t_j zu reparieren]
 versprochen habe
- c. ...daß [den Kühlschrank]_j ich_i dem Kunden [PRO_i t_j zu reparieren]
 versprochen habe

以上の議論を踏まえた上で、スクランブリングを駆動する解釈不可能素性[u Σ]'が二重疑問詞疑問文の派生に如何なる結果をもたらすかを述べる。本稿では補文標識 C には解釈不可能素性[u-wh]'が随意的に現れると仮定している。従って、定形節を埋め込んだ多重疑問詞疑問文(14)の派生が主文の vP まで進んだ段階の構造は(37a,b)となる。

- (14) a. *Wen hat wer gehofft, daß Irina einlädt
 who_{ACC} has who_{NOM} hoped that Irina invites
 'Who has hoped that Irina will invite who?'
- b. Wer hat gehofft, daß Irina wen einlädt
 who_{NOM} has hoped that Irina who_{ACC} invites
- (37) a. [_{VP} wer v[(u-wh), (u Σ)] [_{VP} gehofft, [_{CP} daß [Irina wen[u- Σ] einlädt]]]]]
- b. [_{VP} wer v[(u-wh), (u Σ)] [_{VP} gehofft, [_{CP} wen[u- Σ]_i [daß[u-wh] [Irina t_i einlädt]]]]]

構造(37)に於いて、埋め込み節の主要部'daß'には長距離 wh-移動を成立させる解釈不可能素性[u-wh]'が随意的に現れる。CP 主要部'daß'が素性[u-wh]'を持つ構造を構造(37a)、持たない構造を構造(37b)とする。

先ず、構造(37a)を基底とした派生を考える。この構造が収束する派生を持つか否かは主文構造内に現れる小動辞 v がどのような素性を持つかに依存している。本稿の仮定(27a)では小動辞 v に於ける解釈不可能素性[u-wh]'を持つか否か、

'[u Σ +EPP]'を持つか否かは随意的である。即ち、小動辞 v に与えられる素性の束は以下の四通りとなる。

- (38) a. v[u-wh, u Σ +EPP]
 b. v[u-wh,]
 c. v[, u Σ +EPP]
 d. v[,]

小動辞 v に素性'[u-wh]'が存在する(38a,b)が構造(37a)の主要部である場合、素性'[u-wh]'を削除可能な対象として主文主語'wer'と埋め込み文内の目的語'wen'の二つが存在する。しかしながら、埋め込み文内の目的語'wen'は埋め込み文内に留まっているので PIC より小動辞 v が参照可能な領域内に存在していない。よって、小動辞 v に現れた素性'[u-wh]'の削除を目的とした疑問詞'wen'の移動が構造(37a)に於いて生じることはなく、この素性は vP 指定部に基底生成した疑問詞'wer'によって削除される。また、小動辞 v に現れるもう一つの解釈不可能素性'[u Σ +EPP]'について、素性'[u Σ]'が現れない小動辞 v(38b,d)が構造(37a)の主要部である場合、この素性を要因とするスクランブリング移動も生じない。一方、素性'[u Σ]'が現れた小動辞 v(38a,c)が構造(37a)の主要部であったとしても、この素性を削除可能な埋め込み文内の目的語'was'は、先の素性'[u-wh]'削除と同様に、小動辞 v が参照可能な領域内には存在しないので、結局、素性'[u Σ]'を削除する為に駆動される移動の対象にはならない。よって、構造(37a)の小動辞 v に素性'[u Σ]'が現れると、この素性を削除する術はなく派生は収束しない。加えて、小動辞 v が解釈不可能素性'[u-wh]'を持つ場合でも、埋め込み文内の疑問詞'wen'が埋め込み文外へ移動することは PIC より許されない。結局、構造(37a)に於いて主文の小動辞 v が如何なる素性を持とうとも疑問詞'wen'が埋め込み文内にある限りこの小動辞 v が疑問詞'wen'を参照することは不可能なので、疑問詞'wen'が優位性に反して主文主語である疑問詞'wer'を越えて移動することは不可能である。

次に、構造(37b)を基底とした派生を考える。構造(37b)では、埋め込み節 CP の補文標識が持つ素性'[u-wh]'は補文内目的語である疑問詞'was'が CP の指定部へ移動することによって削除されている。その後さらに派生が進み、主文の小動辞句 vP が生成される。また、構造(37b)の派生と同様に小動辞 v が持つ素性の束は(38)に上げられる四通りがある。

一方、(38a,c)のように小動辞 v の素性'[u Σ]'が+EPP'である場合、素性'[u Σ]'を削除する移動の対象となるのは埋め込み文内目的語'wen'である。だが、'wen'が持つ Σ 素性は仮定(35)より定形節を越えると非活性化してしまう為、素性[u

Σ]を削除することは不可能となる。即ち、構造(37b)の vP 主要部に[uΣ]が存在する時、派生は収束せず非文法的になる。

結局、(37a,b)の何れを基底的な構造としたとしても、更にその構造に埋め込まれる小動辞vに与えられることが可能な素性の束(38a,b,c,d)の何れを選択したとしても、定形節内疑問詞の移動が主文内疑問詞の移動に対して経済的に優位、もしくは等価となることはない。よって、(14a)のように優位性に反する移動を含んだ派生が収束することはなく非文であり、主文補文標識 C が持つ素性[u-wh]'は(14b)のように主文主語疑問詞'wer'を移動することにより削除される。

- (14) a. *Wen hat wer gehofft, daß Irina einlädt
 who_{ACC} has who_{NOM} hoped that Irina invites
 b. Wer hat gehofft, daß Irina wen einlädt
 who_{NOM} has hoped that Irina who_{ACC} invites
 'Who has hoped that Irina will invite who?'

それに対して、非定形節内に現れた疑問詞を主文内部の解釈不可能素性を削除する為に移動することは可能であり、それが優位性に反した下位疑問詞の移動であったとしても派生は収束する。

- (39) [_{VP} v[(u-wh), (uΣ)] [_{VP} was[uΣ]_j überredet [_{CP} wen[uΣ]_i [_{TP} dir zu t_i verkaufen]]]]
 (40) a. [_{VP} was[uΣ]_j v[(u-wh), (uΣ)] [_{VP} t_j überredet [_{CP} wen[uΣ]_i [_{TP} dir zu t_i verkaufen]]]]
 b. [_{VP} wen[uΣ]_i v[(u-wh), (uΣ)] [_{VP} was[uΣ]_j überredet [_{CP} t_i [_{TP} dir zu t_i verkaufen]]]]

即ち、構造(39)に於いて小動辞vが持つ解釈不可能素性[u-wh]、[uΣ]を削除する為に行う移動の適用候補として'was[uΣ]_j'と'wen[uΣ]_i'の二つが考えられるが、この場合どちらを移動したとしても解釈不可能素性[u-wh]、[uΣ]が同時に削除される。しかも、それぞれ一回の移動であり派生に要するコストも等しい。よって、(40a)、(40b)は互いが互いを排除しあうことはない。結果、構造(40a)より派生した文(16a)と(40b)より派生した文(16b)、いずれも文法的になる。

- (16) a. Wen hast du überredet [was dir zu verkaufen]?
 Who have you persuaded what to-you sell
 'Who did you persuade to sell what to you?'
 b. Was_i hast du wen überredet [t_i dir zu verkaufen]?

What have you who persuade to-you sell
 Lit. 'What did you persuade who to sell to you?'

Kuno (2001: 50 (29))

5. 'incoherent'な非定形節に隔てられた二重疑問詞が示す優位性

以上のように、移動の対象が持つ素性[Σ]が小動辞 *v* に内在する解釈不可能素性[$u\Sigma$]を削除可能である場合に限り、非定形節を跨いだ長距離スクランブリングや優位性に反した *wh*-移動が可能となる。もしこの説明が正しければ、長距離スクランブリング可能性と優位効果消失との間には密接な関連が存在し、スクランブリングが不可能であれば優位効果消失も起こらないという予測を行うことができる。この予測の正しさを示す例として、本節ではドイツ語の非定形節に与えられる '(in)coherent' という性質に注目する。

Grewendorf & Sternefeld (1990)はドイツ語のスクランブリングは単一節内に限定された(*clause-bound*)現象であり、非定形節を越えた長距離スクランブリングが許されるのは(41a)のように非定形節が 'coherent' な場合に限られ、(41b)のような 'incoherent' な非定形節からのスクランブリングは許されないとしている⁹。

- (41) a. weil den Max_i jeder_{NOM} t_i zu kennen glaubt
 because ART Max everyone to know believes
 'because everyone believes themselves to know Max'
- b. *weil den Max_i jeder_{NOM} t_i zu kennen bedauert
 because ART Max everyone to know regrets
 'because everyone regrets to know Max'

Grewendorf & Sternefeld (1990: 9 (6))

Grewendorf & Sternefeld (1990)では 'coherent' な非定形節と 'incoherent' な非定形節はスクランブリング以外にも否定のスコープ解釈についても異なる振る舞いを示すと言われている。それによると、'coherent' な非定形節内の否定表現 'niemanden' は非定形節を越えた広いスコープが与えられた解釈が可能であるが、'incoherent' な非定形節内に現れた否定表現 'niemand' に対して同様に広いスコープ解釈を与えることはできず非定形節に限定された狭いスコープ解釈しか与えられない。

⁹ ドイツ語の非定形節の '(in)coherent' については Bech (1955)を参照。

- (42) a. weil Max niemanden zu kennen glaubt
 because Max no one to know believes
 i. 'because Max believes to know no one'
 ii. 'because Max doesn't believes to know anyone'
- b. weil Max niemanden zu kennen bedauert
 because Max no one to know regrets
 i. 'because Max regrets to know no one'

即ち、(42a)の動詞'glaubt'の補部である'coherent'な非定形節内の否定表現'niemanden'は非定形節をスコープとする解釈(42a.i)と'weil'節全体をスコープとする解釈(42a.ii)の二つの解釈の間で曖昧であるのに対して、(42b)の動詞'bedauert'の補部である'incoherent'な非定形節内の否定表現'niemanden'には非定形節をスコープとする解釈(42b.i)しか許されない。

Grewendorf & Sternfeld (1990)は非定形節が'coherent'であるか否かは構造上区別され、その違いがスクランプリング可能性とスコープ解釈の取り方の違いに反映されるとしている。

- (43) a. weil [_{IP} den Max_i [_{IP} jeder_{NOM} [_{VP} t_i [_V zu kennen glaubt]]]]
 b. *weil [_{IP} den Max_i [_{IP} jeder_{NOM} [_{CP} PRO [_{VP} t_i zu kennen]]] bedauert]]

非定形節が'coherent'である場合、非定形節は(43a)のように主動詞の投射内に完全に組み込まれてしまっているが、'incoherent'な非定形節は独立して補文節 CP を形成している。Grewendorf & Sternfeld (1990)は、'coherent'な非定形節は(43a)のような単一節の構造を取ることでスクランプリングが許されるのに対して、'incoherent'な非定形節(43b)は埋め込み節を含んだ構造であるため許されないと説明している。同様に、否定表現'niemanden'のスコープ解釈も clause-bound な現象であると仮定すれば、(42a,b)に示された解釈の違いも構造(43a,b)のように途中に節境界が介在するか否かの違いとして説明することができる。

Grewendorf & Sternfeld (1990)が(43)に提示した'(in)coherent'な'zu'不定詞句の構造は近々の最小主義的統語論の枠組みからは受け入れがたいものかもしれないが、そこで提示された'incoherent'な非定形節からのスクランプリングは許されないという事実は重要である。何故なら、定形節以外に(長距離)スクランプリングが許されない統語環境として'incoherent'な'zu'不定詞句という環境が与えられ、このような環境に対して本稿の仮定より予測(46)が得られるからである。

- (44) ドイツ語に於いて、(長距離)スクランブリングによって越える事が不可能な境界に隔てられた二重疑問詞の間には優位性が観察される。
- (45) 'incoherent'な非定形節を越えるスクランブリングは認められない。
- (46) 'incoherent'な非定形節を跨いだ二重疑問詞は優位性を示す。

本稿では長距離スクランブリングと長距離優位効果に共にみられる節の定形性に依存した条件を捉える為に、素性[uΣ]に関して仮定(35)を与えた。

- (35) 素性[uΣ]は定形である CP を越えると非活性化する。

ここで'incoherent'な'zu'不定詞句は非定形ではあるにもかかわらず仮定(35)が適用される CP であると考えれば、'daß'定形節に隔てられた二重疑問詞に優位効果が観察されるように'incoherent'な'zu'不定詞句に隔てられた二重疑問詞にも主文疑問詞が優位となる優位効果が観察されると予測される。具体的には、(47)に於いて主文主語である'wer'と非定形節内目的語'wen'の何れを文頭に wh-移動させるかに応じて文法性の非対称性が存在する。

- (47) a. Wer glaubt wen zu kennen?
Who believes who to know
'Who believes himself to know whom'
- b. *Wen bedauert wer zu kennen?
Whom regrets who to know
*Whom does who regret to know?
- (48) a. Wen glaubt der Hanz zu kennen?
whom believes Hans_{NOM} to know
'Whom does Hans believe to know?'
- b. Wen bedauert der Hanz zu kennen
whom regrets Hans_{NOM} to know
'Whom does Hans regret to know?'

6. 優位現象と Wackernagel Movement

最後に弱代名詞 (weak pronoun, w.pro) に先行した主語疑問詞がその他の非主語疑問詞に対して示す優位性を挙げる。ドイツ語では弱代名詞¹⁰に先行する

¹⁰ (49a,b,c,d)では弱形代名詞が全部要素と縮約(contraction)した形式で出現している。

主語疑問詞を越えて他の疑問詞が文頭へ wh-移動した多重疑問詞疑問文を形成することはできない。

- (49) a. wann hat's wer gesehen
when has-it who seen
b. ?*wann hat wer's gesehen
when has who-it seen
'who saw it when?'
c. wem hat's wer gegeben
who_{DAT} has-it who given
d. ?*wem hat wer's gegeben
who_{DAT} has who-it given
e. wem hat es wer gegeben
who_{DAT} has it who given
f. ?*wem hat wer es gegeben
who_{DAT} has who it given
'who gave it to whom?'

Fanselow (2004: 100 (51))

- (50) ドイツ語の多重疑問詞疑問文に於いて、疑問詞が弱代名詞に前置された時、その疑問詞を越えて下位の疑問詞が wh-移動してはならない。

この現象はドイツ語に於ける優位現象とスクランブリング現象には相関関係が存在し、この二つの移動現象には小動辞 *v* が持つスクランブリング素性'[u Σ]' が深く関わっていると云う本稿の主張を支持する証拠となる。ここで(49)に提示された対比について議論する為に、Fanselow (2004)に従いドイツ語の弱代名詞は統語構造上小動辞句 *vP* の最上位である左端を占めると仮定する。

- (51) ドイツ語の弱代名詞 (weak pronoun, w.pro) は *vP* の左端に位置する (*vP* 境界を標識する)

また、Müller (2001)はこのような弱代名詞の移動を'Wackernagel Movement'と呼び、主格名詞句以外の文要素が Wackernagel Movement により *vP* の最左端に移動した弱代名詞を越えて左側へ移動することはできないとしている。

- (52) a. daß der Fritz es₁ t_{NOM} gestern der Maria t₁ gegeben hat
 that Fritz_{NOM} it_{ACC} yesterday Maria_{DAT} given has
 '... that Fritz gave it to Maria yesterday.'
- b. *daß der Maria es₁ der Fritz gestern t_{DAT} t₁ gegeben hat
 that Maria_{DAT} it_{ACC} Fritz_{NOM} yesterday given has
- Müller (2001-(10))

Müller (2001)は、Wackernagel Movement はスクランブリングとは異なる動機によって引き起こされ、弱代名詞自体にはスクランブリング素性[uΣ]を削除する能力はないと仮定している¹¹。これに従い弱代名詞は解釈不可能素性[uΣ]を削除不可能であるとすれば、小動辞 v が持つ素性[uΣ]は主語以外の文要素が vP-指定部へ移動することによって削除されなければならない。ここで、主語疑問詞に加えてもう一つ疑問詞を含み、更に弱代名詞'es'が Wackernagel Movement を起こした vP の派生を考える。この時、小動辞 v が解釈不可能素性[uΣ]を持つならば、vP 内では Wackernagel Movement に加えてスクランブリングも生じることになる。その結果として、vP 構造(54a)、もしくは(54b)が派生される。

- (53) a. [_{VP} w.pro NP_{NOM} v[uΣ][_{VP} Adv NP_{DAT} t_{w.pro} V]]
 b. [_{VP} w.pro NP_{NOM} Adv v[~~uΣ~~][_{VP} t_{Adv} NP_{DAT} t_{w.pro} V]]
 ▲──────────────────┘
- c. [_{VP} w.pro NP_{NOM} NP_{DAT} v[~~uΣ~~][_{VP} Adv t_{DAT} t_{w.pro} V]]
 ▲──────────────────┘
- (54) a. [_{VP} es wer wann v[~~uΣ~~] [_{VP} t_{wann} t_{es} gegeben]]
 ▲──────────────────┘
- b. [_{VP} es wer wem v[~~uΣ~~] [_{VP} t_{wem} t_{es} gegeben]]
 ▲──────────────────┘

これまで述べてきたように、小動辞句 vP はフェイズであり、それを隔てた二重疑問詞の間で優位効果に反した移動が許される為には、下位疑問詞は一度 vP 指定部へ移動する事で PIC 違反を回避する必要がある。弱代名詞'es'に Wackernagel Movement が適用された二重疑問詞疑問文(49a,e)でも、小動辞 v が持つ解釈不可能素性[uΣ]は主語疑問詞'wer'よりも下位にある疑問詞'wann'や'was'を vP 指定部まで移動させる要因となり、その文派生の途中で構造(54a,b)

¹¹ Müller (2001)によると、Wackernagel Movement によって弱代名詞は表層的に補文標識 C の直後の位置を占める。Müller (2001)は vP 構造内の最も上位の位置を Wackernagel Movement の着点であると仮定している。

に記された移動が生じる。その後、構造(54a,b)内の何れかの疑問詞が文頭へ wh-移動することで文(49a,e)が生成される。

以上のように弱代名詞の移動はスクランブリングではなく **Wackernagel Movement** であると仮定した場合、(49a,e)のどちらも文法的な文として生成される。だが、この仮定の下では、(49)に挙げた六つの二重疑問詞疑問文の中で(49b,d,f)が示す非文法性を予測できないことが問題となる。

- (49) b. [?]*wann hat wer's gesehen
when has who_{NOM}-it seen
'who saw it when?'
- d. [?]*wem hat wer's gegeben
who_{DAT} has-it who given
- f. [?]*wem hat wer es gegeben
who_{DAT} has who it given
'who gave it to whom?'

本稿はこの問題に対して(49b,d,f)の非文法性は優位効果とは独立した要因によって帰結されると考える。即ち、ドイツ語の疑問詞には wh-移動によって節頭に現れた場合を除き弱代名詞に先行することを禁止する制約が存在すると考える。この制約が存在する証拠を示す為に、Postma (1994)、Fanselow (2004)、Bruening (2007)が挙げたドイツ語に於ける疑問詞の不定用法に注目する。Bruening (2007)によるとドイツ語の疑問詞には疑問詞疑問文内に現れて疑問演算子、及びそれに束縛される疑問変項として用いられる場合と平叙文内に現れて不定表現として用いられる場合がある¹²。ここでは、このような不定表現を不定用法疑問詞と呼ぶことにする。

- (55) a. dann hat's wer gesehen
then has-it someone seen
'then, someone saw it'
- b. ^{??}dann hat wer's gesehen
- c. dem hat's wer gegeben
him_{DAT} has-it someone given

¹² Bruening (2007)によると、疑問詞の不定表現としての解釈は Existential Closure によって生じた存在量化詞による Unselective Binding (Baker (1970)、Pesetsky (1987)、Reinhart (1998)) によって与えられる。

- 'someone gave it to him'
- d. [?]* dem hat wer's gegeben
- e. dem hat es wer gegeben
- f. [?]* dem hat wer es gegeben
- g. hat denn wer angerufen?
has ptc. someone called
'did someone call?'
- h. [?]* hat wer denn angerufen?

Fanselow (2004: 101 (52))

Fanselow (2004)によると、(55b,d,f)のように Wackernagel Movement が適用された弱代名詞に不定用法疑問詞である主語が先行すると文容認度は著しく低下する。本稿はこのような文容認度の低下がどうして生じるのかという問題に答えることはできないが、疑問表現、不定用法に関わらず疑問詞が Wackernagel Movement を適用された弱代名詞に先行することができないという制約がドイツ語に存在する事は(55b,d,f)より明らかである。この制約によって(55b,d,f)の容認性が低下しているのと同様、主語疑問詞が Wackernagel Movement が適用された弱代名詞に先行する疑問詞疑問文(49b,d,f)も同じ制約による容認性低下が生じる。

7. 結語

本稿では二重疑問詞疑問文に観察される優位性を最短牽引(AC)や最小連結(MLC)のような構造上の上下関係によって定義される優位性ではなく、二つの派生間の「派生の経済性の原理」に則った競合の結果として生じた優位性であると主張した。この主張より、優位効果は以下の二つの条件を満たす場合に消失するという事が帰結される。

- (56) a. 下位フェイズに由来する下位疑問詞を上位フェイズへ上昇させる動機となる素性が存在する
- b. 上位フェイズ内で派生間の競合に優劣が存在しない

そして、この主張を支持する証拠としてドイツ語に於ける優位効果とその消失を考察し、その中で下位フェイズから上位フェイズへ下位疑問詞を上昇させる要因として Müller (2004)が提案したスクランブリング移動を駆動する素性[uΣJ]を仮定した。この素性を仮定する事により、ドイツ語に於ける優位現象とスクランブリング現象との間に相関関係が存在することが導かれる。それを示す

事例として、'coherent'な非定形節を跨いだ二重疑問詞間に観察される優位現象や弱代名詞 (weak pronoun, w.pro) に先行した主語疑問詞が示す優位性が存在し、これらの現象に対しても説明を与えた。

最後に本稿の主張が正しければ、Fanselow (2004)、Grohmann (1997)、Kuno (2001)、Müller (2004)、Wiltschko (1997)等のように優位効果消失をスクランブリング移動の可能性へ直接的に結び付ける提案では取り扱えないとされてきたスクランブリングを持たない言語であるスペイン語やスウェーデン語等に見られる優位効果消失現象についても、スクランブリング素性[uΣ]'の下位特性であるEPP特性の値'+/'を個別言語毎に、もしくは個別語彙毎に規定する事によって説明できるという可能性が開かれることも指摘したい。だが、この可能性の追求は今のところ将来の課題に留める。

参考文献：

- Baker, C. L (1970) "Notes on the description of English questions: The role of an abstract question morpheme". *Foundations of Language* 6:197-219.
- Bruening, Benjamin (2007) "Wh-in-Situ Does Not Correlate with Wh-Indefinites or Question Particles". *Linguistic Inquiry* 38: 139–166.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase". In Michael Kenstowicz (eds) *Ken Hale: A life in language*. 1-52. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2005) On Phases. MS., MIT.
- Fanselow, Gisbert (2004) "The MLC and derivational economy". in A. Stepanov, G. Fanselow & R. Vogel (Hg.). *The Minimal Link Condition*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Grewendorf, Günther & Joachim Sabel (1994) "Long Scrambling and Incorporation". *Linguistic Inquiry* 25: 263-308.
- Grewendorf, Günther & Wolfgang Sternefeld (1990) "Scrambling Theories". in Günther Grewendorf & Wolfgang Sternefeld (eds). *Scrambling and Barriers*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Grohmann, Kleanthes. K. (1997) "German Superiority". *Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik* 40: 97–107.
- Haider, Hubert (1985) "Verb Second in German". in Hubert Haider & Martin Prinzhorn (eds) *Verb Second Phenomena in Germanic Language*. Dordrecht: Foris.
- Haider, Hubert, Susan Olsen & Sten Vikner (1995) "Introduction". in Hubert Haider, Susan Olsen & Sten Vikner (eds) *Studies in Comparative Germanic Syntax*.

Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers.

- Kuno Masakazu (2001) "On the absence of Superiority Effects in Scrambling Languages". *Linguistic Research* 18: 39-59.
- Müller, Gereon (2001) "Harmonic Alignment and the Hierarchy of Pronouns in German". in Horst Simon & Heike Wiese (eds) *Pronouns - Grammar and Representation*: 205-232. Amsterdam: Benjamins.
- Müller, Gereon (2004) "Phase-Impenetrability and Wh-Intervention". in Arthur Stepanov, Gisbert Fanselow & Ralf Vogel (eds) *Minimality Effect in Syntax*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Pesetsky, David (1987) "Wh-in-situ: Movement and unselective binding". In Reuland, E and Alice ter Meulen (eds) *The representation of (in) definiteness*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Pesetsky, David. and Esther Torrego (2001) "T-to-C Movement: Causes and Consequence". In Michael Kenstowicz (ed) *Ken Hale: A life in language*: 355-426. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Postma, Gertjan (1994) "The indefinite reading of WH". In Reineke Bok-Bennema & Crit Cremers (eds) *Linguistics in the Netherlands*: 187-198. Amsterdam: John Benjamins.
- Reinhart, Tanya (1998) "WH-in-situ in the Framework of the Minimalist Program". *Natural Language and Linguistic Theory* 5: 335-375.
- Roussou, Anna (1993) "I-to-C Movement and the that-t Filter". *UCLWPL* 5: 103-127.
- Stroik, T (1996) *Minimalism, Scope, and VP Structure*. London: SAGE Publicaton.
- Toyoshima, Takashi (2005) "Preemptive Move Towasr Elimination of Lexical Subarray: Dynamic Economy". In Yehuda N. Falk (eds.) *Proceedings of Israel Association for Theoretical Linguistics* 21. Technion - Israel Institute of Technology.
- Wiltschko, Martina (1997) "Scrambling, D-linking and Superiority in German". *Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik* 41: 107-142.
- 山本 将司 (2010) 「経済性の原理に優位効果を還元する試みに関する一考察Ⅱ - 「最大効果の条件」を巡って-」 『文学研究』 第百七輯、205-222. 九州大学大学院人文科学研究院

Superiority Effect and its Disappearance in German

Yamamoto Shouji

(Part time lecturer, Nishinohon Kokusai Kyouiku Gakuin)

The article proposes that the superiority phenomenon and its disappearance can be deduced from the Least Effort and the Phase theory. In this approach, a superiority effect is a result of a competition among potentially possible derivations. The superiority is determined based on the estimated cost of each movement, not the structural closeness of the two wh-words. Furthermore, assuming that the derivations in the competition are evaluated at the end of every phase, the wh-word in the upper phase is superior to the one in the lower phase unless the latter has moved up to the upper phase beforehand. Conversely, if the multiple wh-words occur in a common phase and the cost of each derivation is equivalent, the superiority effect will disappear. In order to confirm this prediction, I examine the contrast of the superiority effect observed in English and German. I also discuss the superiority effect and its disappearance in definite clauses in which a weak pronoun moves to the front of vP (Müller (2004)'s Wackernagel Movement) and in indefinite clauses of which the clause type is coherent (Grewendorf & Sternfeld (1990)). I show that even in German, where disappearance of the superiority effect is extensively observed, the effect is preserved in these syntactic environments.

(初稿受理日 2011 年 2 月 28 日 最終稿受理日 2011 年 7 月 3 日)